

沢村貞子著「わたしの台所」朝日文庫、朝日新聞社 1990年9月20日刊を読む

男女同量

1. 久しぶりで銀座の陶器店へ行った。その店で買って長い間使っていた夫のご飯茶碗にヒビがはいったからである。
2. 大切に扱っているつもりでも毎日のこと、私のものも大分前から縁に傷がついている。なにかとことの多そうな 80 年代を老夫婦がシャンと腰をのばして生きるために、新しい夫婦茶碗でもおごろう、ついでに湯呑も一組……そんな気持だった。
3. 広い店に色どりよく並べられた沢山の瀬戸もの。こんな皿小鉢にほどよく盛りつけたら私の手料理もすこしは引き立つだろうに——とつい見惚れてしまった。
4. 奥まった棚の上に、おめあての夫婦茶碗と湯呑の一組が飾ってあった。男物は紺、女物は赤のすっきりした更紗模様がいかにも洒落ている。一目で気に入ったけれど、値段表を見てちょっとためらった。心づもりしていたよりもずっと高い。
5. なんとなく、^{ぶん}分不相応な贅沢をするようで、だれにともなく気が引けて、首をかしげているうちに、フトおかしなことに気がついた。
6. (アラ……)
その茶碗も湯呑も男女同じ大きさなのである。違うのは更紗模様の紺と赤だけだった。
7. (どういことなのかしら……)
私が今まで見馴れてきた夫婦茶碗はどれも、大きい男物の傍に一まわりこぶりな女物がそっと寄りそっていたのに……。
8. (これは特別なのだろうか……)
いそいで店内を見てまわったが、他の棚に飾られた 4 組も皆、男女同じ大きさだった。
9. とうとう若い男の店員さんに、
「男物と女物と、大きさの違う夫婦茶碗はないのでしょうか」
10. ときいたら、ふしぎそうな顔をした。やがて奥の事務所から年輩の人が出てきて、愛想よく

「こちらにございます」

11. と案内してくれた隅の一对は、たしかに女の方がすこし小さい。それも、よく見れば……という程度の違いで、可愛らしい花模様はいかにも新婚さん向きだった。
12. 結局、はじめに見た更紗模様のを思い切って買って帰った私は、わが家の食卓の上にそれを並べて、ひとりニヤニヤしていた。
13. (男と女と、同じ大きさの茶碗…)
それが、とても嬉しかったのである。
14. 今どきのお嬢さんの中には、男の子のセーターを粋に着こなし(キミ、ボク)の男言葉を何気なく使っている人も沢山いる。翔んでる女とよばれる人も多い。それに反発するように(関白宣言)という男の心意気を示した唄も流行っているらしいが、その中味は遠慮がちでいかにも甘い。そんな世の中で、夫婦茶碗の大きさが同じになったとしても、別に不思議はないだろう。
15. しかし——明治生れの老女にとって、これはやっぱり、かなりのおどろきだった。
16. 私たちは若いころ、
「女のくせに……」
という言葉、日に何度きかされたことだろう。
17. 「女のくせに思ったことを口に出すなんて生意気だ。女のくせに新聞を読むなんてとんでもない。女は黙って、男のうしろに控えていればいいんだ……」
18. それが女らしい女、可愛い女、いじらしい女の典型だった。そういう女性だけが、世間にうけいれられてきた。
19. ものを食べるのも女らしく……うつむき加減につつましく、少しずつ口に運ばなければいけない。男のように大口あけて腹いっぱい食べるなんてみともない、色気もこそもないじゃないか……そう言われたものだ。
20. 下町のおかみさんたちは朝から晩までよく働いた。掃除、洗濯、水仕事——坐っているのは縫いものをしているときだけだった。家の中の力仕事はたいてい女房がやってのけていたから、男の人よりおなかがすくこともあった。それでも、女の茶碗は小さかった。
21. (そりゃあ、男と同じじゃおかしいよ)
自分たちもそう思いこんでいた。ふだんは男たちに負けずに元気なおかみさんたちも、お膳の前

ではおとなしく、小さい茶碗でそっとおかわりをしていた。ご亭主はそれを見て、
「女のくせに、よく食うなあ、色消しだね、まったく……」
としらけた顔をしたものだった。

22. それがいま女の茶碗が男と同じになった。どうやら、それが当り前のこととして通用するようになったらしい。娘のころから心の中で願っていた「男女同権」が、「男女同量」の茶碗にもあらわれたような気がして、私はやっぱり嬉しかった。

23. それから毎日、いそいそとその茶碗や湯呑を使っていたが、1 カ月ほどたつうちに、どことなく身体の調子がおかしくなってきた。どうも胃が重い感じだった。
(……疲れているわけでもないのに)

24. そしてある日、どうやら新しいご飯茶碗のせいだ、と気がついた。

男女同量の茶碗は男の人にあわせてあるので、私は今までよりずっと大きいものを使っていたことになる。そのためについ、ご飯をよそいすぎてしまったらしい。私は昔の女としてはかなり大柄な方だけれど、夫に比べると身長も体重もかなりすくない。それを忘れて同じように盛っていたのは——無茶だった。少々調子にのりすぎた。今まであんまり病気をしなかったのは食事の量を自分にあわせてキチンとしていたせいなのに……反省過多症の私はすぐ、あれこれ考えた。

25. (ここがむずかしいところね。女の人が男の人と同じように扱われるようになったのは嬉しいけれど、誰でも何でも、男と同じになったと思いきむのはいけないのじゃないかしら。もちろん、男性より優れている女性も大ぜいいるけれど、人間はなんといっても個人差があるのだから。自分の体力、能力を冷静に見きわめないと、長い間かかってやっと手に入れた男女同権を生かすことが出来なくなってしまうかも知れない。私は夫と同じ大きさの茶碗を使っているけれど、さて、自分の健康を保つためには、その中にどのくらいの量をよそったらいいか——そのところを私自身がよく考えて、キチンと決めなけりゃあ……)

26. 夕食のあと、流しもとでその茶碗を洗いながら、私の想いはそれからそれへと拡がっていった。男女同量の茶碗の使い方はなかなかむずかしい。でも、やっと手に入れたのだもの、何とかして上手に使いこなしたい。

P31 ~ 36

<コメント>

私が、女優 沢村貞子さんの文章を読み始めたのは、NHK 朝の TV ドラマ「とと姉ちゃん」の原作である「暮らしの手帖」を毎号、高校 1 年生の時から図書館で読んでいたためだ。この「男女同量」の文章も、1981 年に「暮らしの手帖」から刊行されたものだ。おそらく「すてきなあなたに」の中に収められていたものにちがいない。